

動物調査の結果

(1) 概要

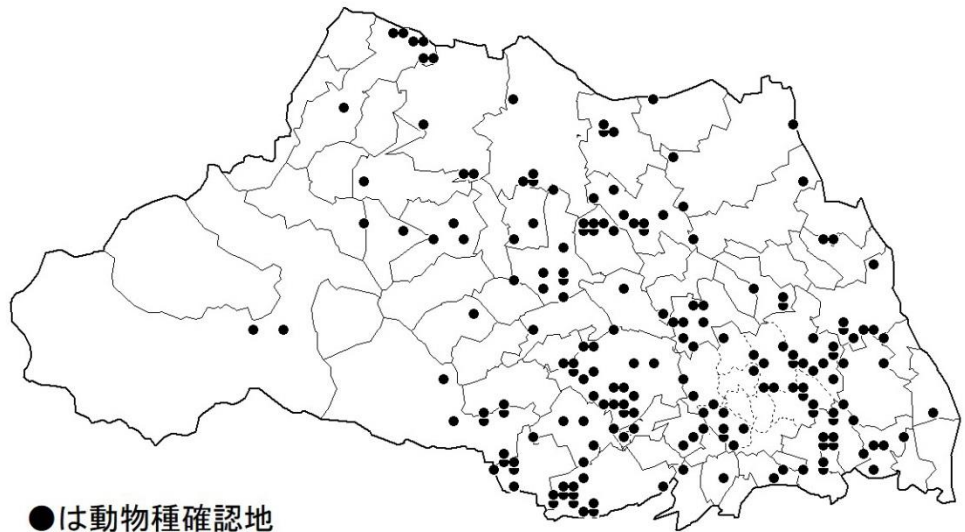
29年度の動物の調査については、前年度と同じ、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）平成27年3月／環境省」に記載された22種に3種を加えた25種を調査対象種として調査を行った。いずれも県内で見つかったり、あるいは発生が懸念されている種で、哺乳類5種、鳥類4種、は虫類2種、両生類2種、魚類4種、昆虫類3種、陸生節足動物3種、その他の無脊椎動物2種である。環境省のリストには国内由来の外来種等を含む229種の動物が記されている。

平成29年5～12月まで行った調査の結果は下表のとおり14種が確認され、このほか調査対象種以外の6種について報告があった。

平成29年度 外来種調査 動物対象種							
通しNo.	分類群No.	分類群	和名	国内の定着段階	リスト区分等	報告件数	個体数
1	1	哺乳類	アライグマ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	31	58
2	2		クリハラリス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
3	3		キタリス	定着初期/限定分布	緊急種/特定	0	0
4	4		ハクビシン	分布拡大期～まん延期	重点種	7	7
5	5		マスカラット	定着初期/限定分布	重点種/特定	0	0
6	1	鳥類	ガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	79	219
7	2		カオグロガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	0	0
8	3		カオジロガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	0	0
9	4		ソウシチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	1	5
10	1	は虫類	カミツキガメ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	1	1
11	2		アカミミガメ	分布拡大期～まん延期	緊急種	57	392
12	1	両生類	ウシガエル	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	59	189
13	2		ヌマガエル	国内由来	重点種	26	210
14	1	魚類	ブルーギル	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	2	21
15	2		コクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
16	3		オオクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
17	4		カダヤシ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	8	240
18	1	昆虫類	ホソオチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種	2	103
19	2		アカボシゴマダラ 大陸亜種	分布拡大期～まん延期	重点種	69	134
20	3		クビアカツヤカミキリ	定着初期/限定分布	その他種	3	40
21	1	陸生節足動物	ハイイロゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
22	2		セアカゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0	0
23	3		クロゴケグモ	定着初期/限定分布	緊急種/特定	0	0
24	1	その他の無脊椎動物	アメリカザリガニ	分布拡大期～まん延期	緊急種	65	918
25	2		スクミリンゴガイ	分布拡大期～まん延期	重点種	2	45
緊急種：総合的に対策が必要な外来種の中の緊急対策外来種							
重点種：同 重点対策外来種				その他種：同 総合対策外来種			
特定：外来生物法で指定された特定外来生物							

(2) 29 年度の状況

調査対象種 14 種が確認された場所は 187 か所。県域では、県北 4 市町、県西 18 市町、東部 11 市町、中央 12 市区、秩父 2 市村の 47 市区町村。地帯区分では低地帯 34、丘陵・台地帯 9、低山帯 4 になる。



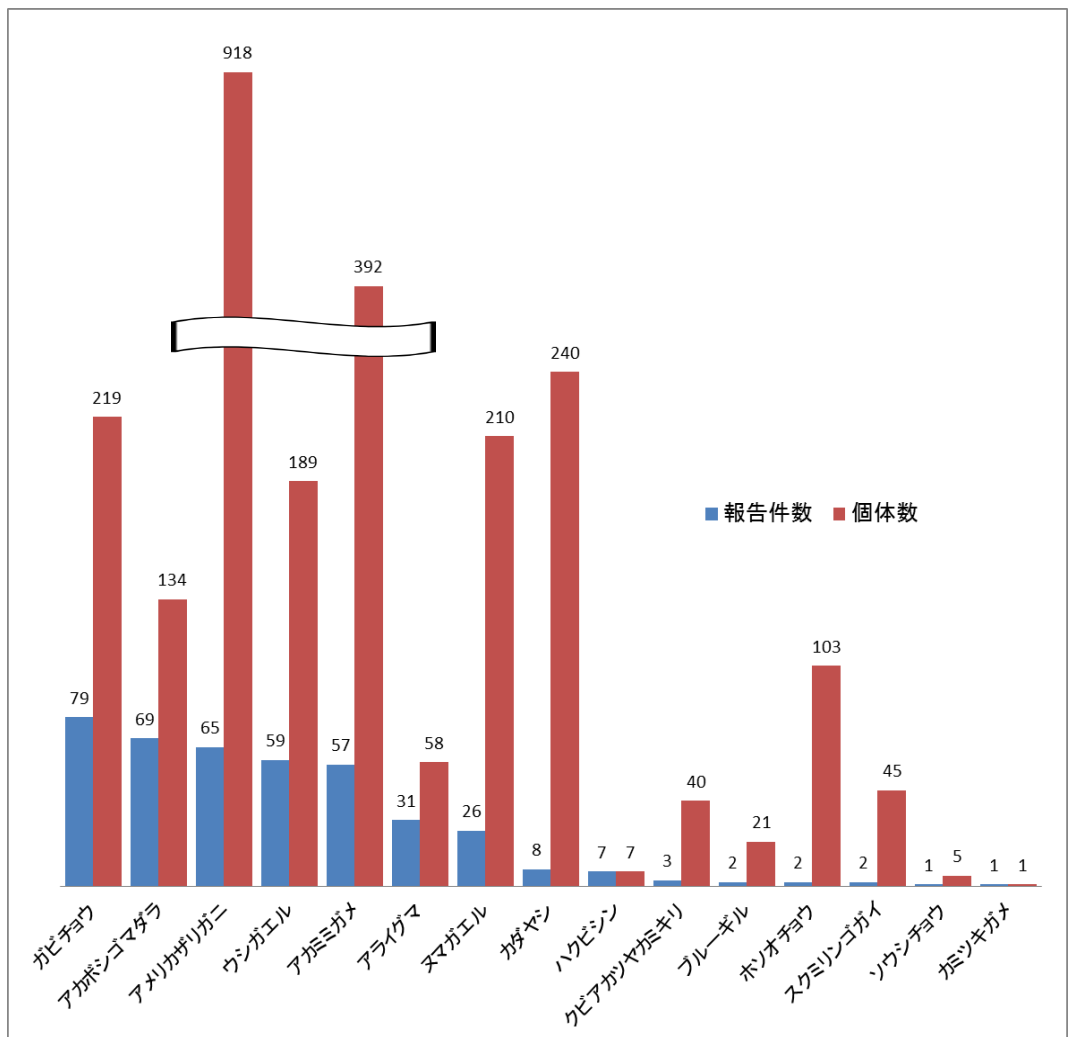
●は動物種確認地

このうち確認の報

告が最も多いのがガビチョウで 79 件。次いでアカボシゴマダラ 69 件、アメリカザリガニ 65 件、ウシガエル 59 件、アカミミガメ 57 件、という順である。昨年と順位は異なるが、同じ種が他の種より

非常に多く報告された。報告件数の中ではアカボシゴマダラの報告が水田等の水辺環境ではどこでも見られるアメリカザリガニよりも多いという結果は気になるところである。

これらを個体数でみると、アメリカザリガニ、アカミミガメ、ホソオチウの 3 種が他種との違いが現れている。アメリ



カザリガニの個体数の圧倒的な多さは想像ができる。次いで多いアカミミガメは、平均すると報告 1 件あたり 7 匹の確認にもなる。生態系被害防止外来種リストでは「生態系に係る潜在的な影響、被害

が特に甚大である」とされている種である。深刻な問題として捉えるべきであろう。一方、ホソオチョウの報告件数は少ないが1地点で100頭以上を確認している。同種の発生地では多数の個体が見られることが多いが、驚くほど多い。繁殖力の強さをうかがわせる結果でもあり早急な対策が求められる。なお、個体数の集計にあたっては、概数で報告があるものはその概数の最少数を積算した。

その他の種について分類群ごとにみると、哺乳類ではアライグマの報告が昨年に近い件数あった。本種は在来の小動物への影響のほか農業被害をもたらし、人家などにも入り込むため対策や駆除が行われているが、依然被害が続いているようである。鳥類については、依然ガビチョウの確認報告が多い。確認地の半数近くは雑木林であるが、他の環境でも昨年同様に記録され、県内各地に分布していることがうかがえる。

両生類については、ヌマガエルの確認の報告数と個体数が多く、ウシガエルとの比較では、昨年のヌマガエルの報告はウシガエルの3分の1程度であったものが、本年は2分の1近くにまでなっている。本種はトウキョウダルマガエルなど在来のカエルと競合が懸念され、県内はもちろん関東平野の広い範囲への分散が心配される。早いうちに専門的な調査が必要と思われる。魚類については、報告数が少なく、昨年報告があったオオクチバスについての確認はなかった。

魚類については、過去の文献や近年各地で行われているかいぼり調査の結果からも分かるとおり、分布が拡大していることは広く知られている。止水域であれば同種の根絶は可能と思われ、かいぼり等への行政支援を期待したい。

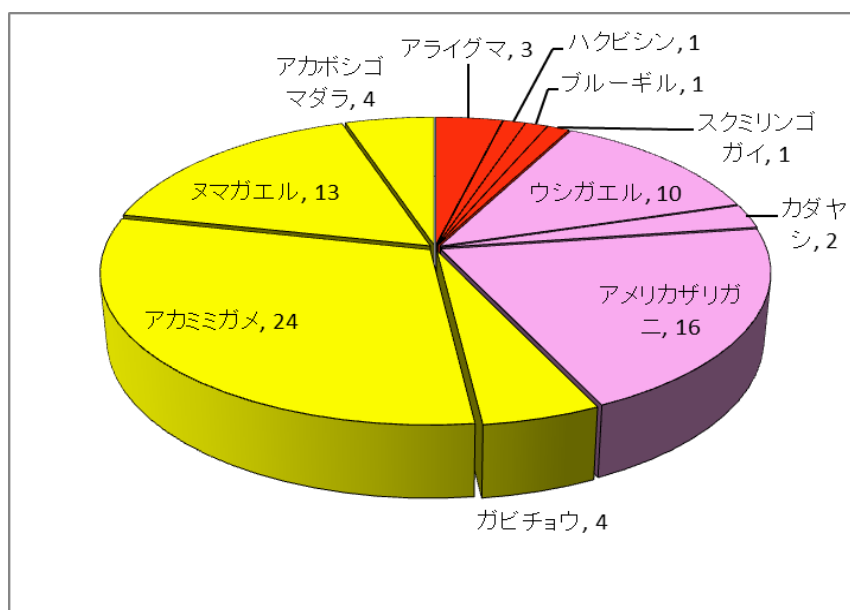
昆虫類については、確認報告の件数は少ないものの影響が心配されるのが、先に記したホソオチョウとクビアカツヤカミキリである。特にクビアカツヤカミキリについては、最近の報道では県内で新たに16か所で被害がでており、行政の取り組みもはじまっているが県内全域の状況は分かっていない。この調査では昨年と同じ場所と思われる調査地から生活痕が確認され、新たに1か所から確認の報告があった。早急に詳細な調査を行い、桜の名所の喪失や農業被害が起こる前に駆除に取り掛かるべきであろう。

その他の無脊椎動物のスクミリンゴガイについても確認の報告数は少ないが、いずれも昨年の確認地の近くからの報告となっており、旺盛な繁殖力を考えると、継続した調査が必要である。

ちなみに外来種の対応では駆除の主体となるのは市町村であることが考えられることから、今回の結果を自治体別にみてみた。調査地が最も多かったのはさいたま市(33調査地)で、ここでは右表の11種が確認されている。次いで川越市(22調査地)7種類、川口市(13調査地)7種類、所沢市(12調査地)6種類の確認であった。さいたま市の確認状況を表したのが次の円グラフである。赤で示した領域は、生態系被害防止外来種リストで被害の深刻度④(人の生

報告件数(さいたま市)		
種名	被害の深刻度	件数
アライグマ	①②③④	3
ハクビシン	①④	1
ガビチョウ	①	4
ブルーギル	①②③④	1
アカミミガメ	①	24
ウシガエル	①③	10
ヌマガエル	①	13
カダヤシ	①③	2
アカボシゴマダラ	①	4
アメリカザリガニ	①③	16
スクミリンゴガイ	④	1

命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす)に該当する種。紫の領域は同リスト③(絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い)に該当する種。黄色の領域は同リスト①(生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である)に該当する種である。このように自治体別に集計してみると、少ない調査地で7種または8種も確認されて



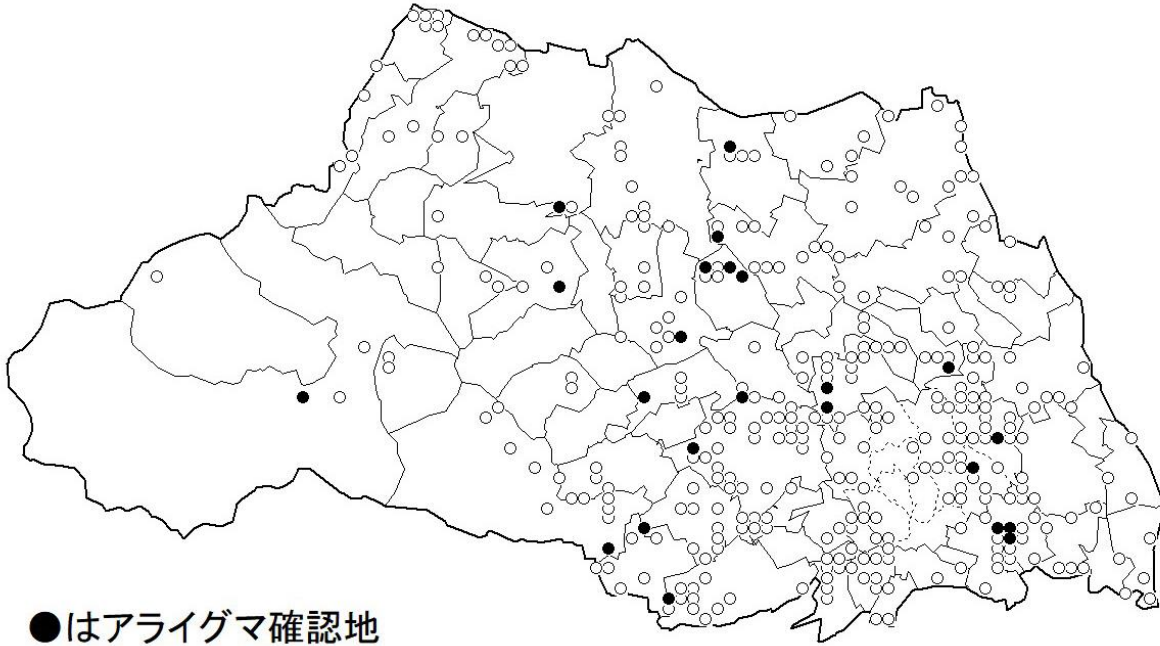
いる市町村があることもわかる。こうしたことから本調査による更なる情報の収集を望むとともに調査の最終年には自治体別の状況も示すべきであろう。

以下に、今回確認された外来種の環境別データの一覧表を示す。表の項目「法的扱い等」のうち「狩猟鳥」は鳥獣保護法による狩猟鳥、「検疫有害」は植物防疫法による検疫有害動物を意味する。

なお、次ページ以降に記載する種別調査結果は、以下の表のNo順となっている。

No.	分類	種名	調査対象種	法的扱い等	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
1	哺乳類	アライグマ	○	緊急種/特定	9	2	7	13	31
2	哺乳類	ハクビシン	○	重点種	3			4	7
3	鳥類	ガビチョウ	○	重点種/特定	43	19	11	6	79
4	鳥類	ソウシチョウ	○	重点種/特定	1				1
5	鳥類	ワカケホンセイインコ		その他種				1	1
6	鳥類	コジュケイ		狩猟鳥	2		1	1	4
7	鳥類	シラコバト						1	1
8	は虫類	カミツキガメ	○	緊急種/特定		1			1
9	は虫類	アカミミガメ	○	緊急種	1	39	9	8	57
10	両生類	ウシガエル	○	重点種/特定	2	32	20	5	59
11	両生類	ヌマガエル	○	重点種		6	19	1	26
12	魚類	ブルーギル	○	緊急種/特定		1		1	2
13	魚類	カダヤシ	○	重点種/特定		5	3		8
14	魚類	カムルーチ		旧要注意外来生物		1			1
15	昆虫類	ホソオチョウ	○	重点種		1		1	2
16	昆虫類	アカボシゴマダラ	○	重点種	30	12	15	12	69
17	昆虫類	クビアカツヤカミキリ	○	その他種	1			2	3
18	昆虫類	アメリカシロヒトリ		検疫有害		2			2
19	甲殻類	アメリカザリガニ	○	緊急種		29	28	8	65
20	軟体動物	スクミリンゴガイ	○	重点種			2		2
		計			92	150	115	64	421

1 アライグマ(アライグマ科) *Procyon lotor* 特定外来生物 ・ 緊急対策外来種



●はアライグマ確認地



分布状況

昨年より報告数が増え、秩父市を含め全県的に分布範囲が広がった。上尾市からは昨年に引き続いて6月に幼獣の報告があった。県央部でも繁殖していることが改めて確認された。

環境別報告件数

市街地からの報告件数が最も多く、次いで雑木林と水田・休耕田・畑からの報告が多かった。足跡や爪痕などの生活痕による確認数が半数以上を占めており、雑木林や市街地でも湿地で足跡が確認されている。アライグマの生態特性として河川や水路を移動することや水辺周辺で餌を捕ることが多いことが反映されている。市街地のさいたま市では水路内での目撃、狭山市では神社の建物に残された爪痕や足跡による確認の報告があった。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	9	29.0
河川敷	B	2	6.5
水田・休耕田・畑	C	7	22.6
市街地	D	13	41.9
合計		31	100

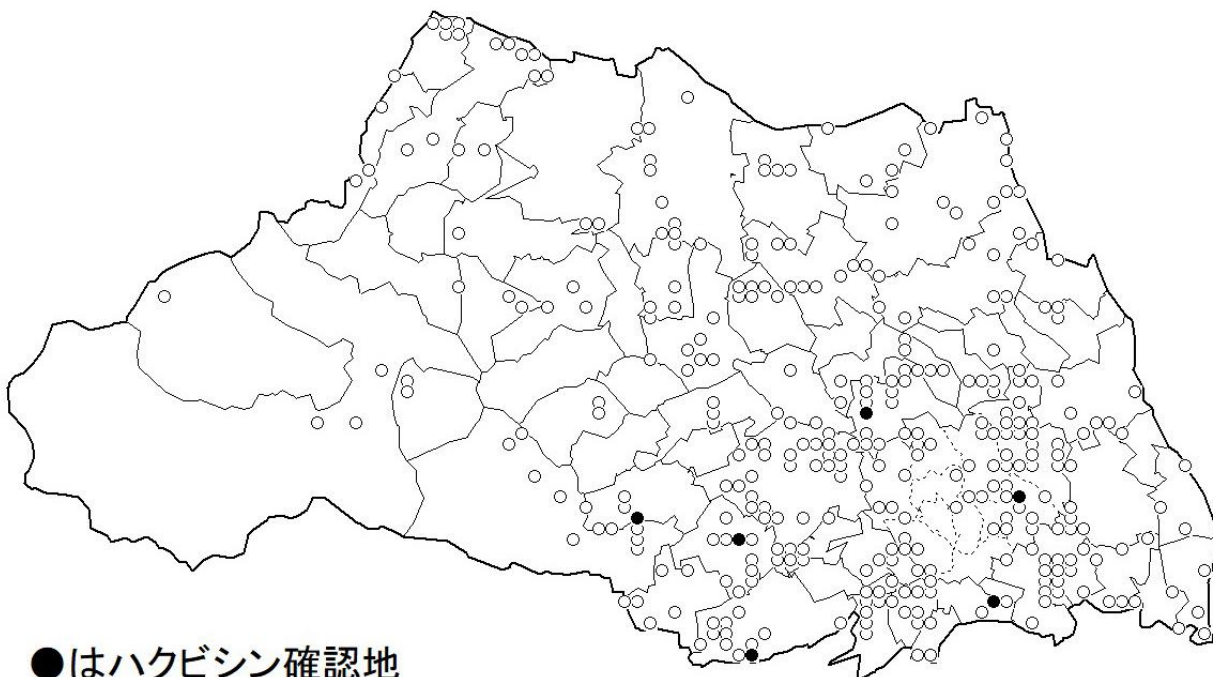
種の概要

北米原産のペット由来の外来種。外来生物法（環境省：2004年）により特定外来生物に指定されている。尾のしま模様と目の周りの黒模様が両目でつながっているのが特徴である。自然の状態では木のウロなどで繁殖するが、家屋の屋根裏でも繁殖する。在来のタヌキやキツネ、イタチなどと競合し、また、カエル類やトウキョウサンショウウオなどの両生類やフクロウ、サギ類などの鳥類にも影響を与えている可能性が高い。農業被害や住居被害が問題となっている。

当該種の消長

日本では1962年に愛知県犬山市の動物展示場から逃亡し野生化したのが最初とされる。関東地方では、神奈川県鎌倉市で1998年頃に野生化が始まったとされる。埼玉県県内で目撃されるようになったのは2000年頃からである。外来生物法が施行されたことにより都内で飼われていたアライグマを高速道路を利用して野外に捨てる行為が頻発し、ICから近い東松山市を中心とした比企地域に捨てられたアライグマが定着し、それらが爆発的な増加の原因と考えられている。埼玉県では「埼玉県アライグマ防除計画」に基づき2007年より計画的な防除対策（計画捕獲）を実施している。

4 ハクビシン(ジャコウネコ科) *Paguma larvata* 緊急対策外来種



分布状況

報告件数7件のうち「目撃による確認」が6件、「死体による確認」が1件というように生活痕による確認が困難なためか、各市町村の捕獲実態にくらべると報告数が少ない。県南、県西から報告があった。

環境別報告件数

市街地と雑木林からの報告があったが、水田・休耕田・畑や河川敷からはなかった。近年、都内のビル街で電線を渡るハクビシンの目撃情報が増えていると言われているが、今回の調査でも民家の屋根や学校のフェンスの上などを歩く姿が目撃されている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	42.9
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	4	57.1
合計		7	100

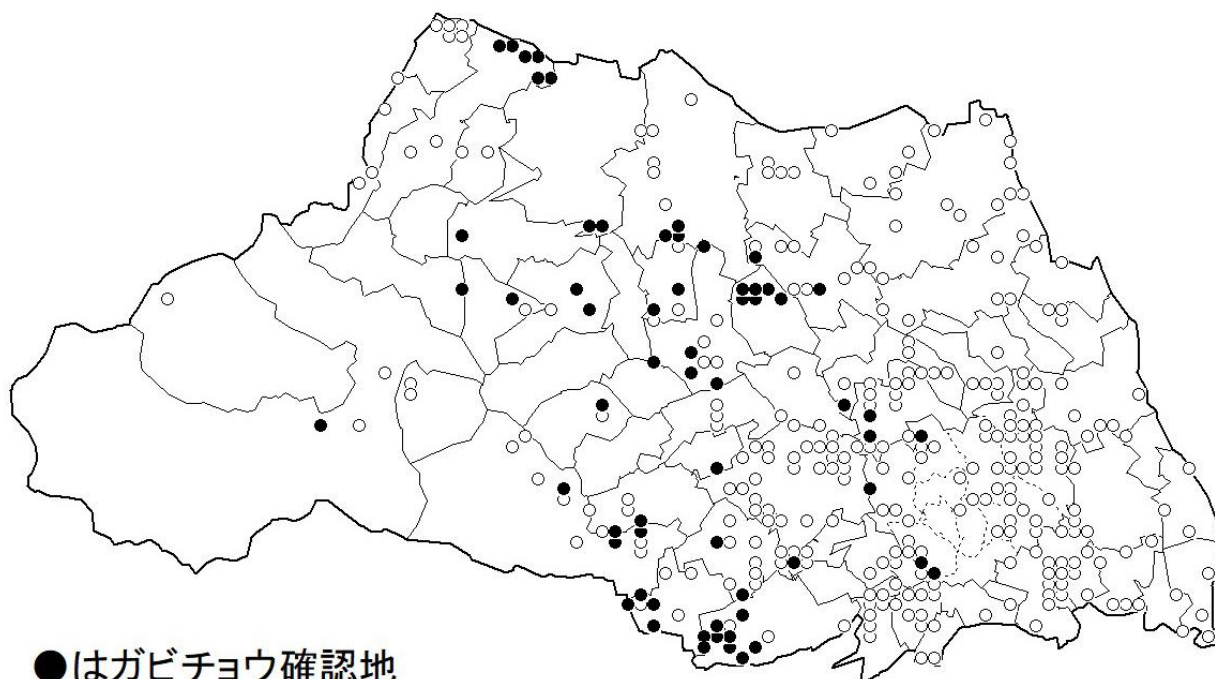
種の概要

日本で唯一のジャコウネコ科の哺乳類。額から鼻先まで白い模様が入る。胴長・短足で尾が長いのが特徴。本来は樹上生活者でバランス感覚は非常に優れている。足でものをつかむことができるため、電柱や木や塀に登ることが多く、電線の上を歩くことができる。近年民家の屋根裏や軒下などにも棲みつくことが多く市街地で増加している。ハクビシンは雑食性で野鳥や昆虫の他、ブドウ、ナシなどの果樹やトウモロコシやトマトなどの野菜も好み、農作物被害が増えている。決まった繁殖期はなく、年に二度繁殖することもある。

当該種の消長

日本では1943年に静岡県で捕獲されたのが最初とされる。関東地方では1958年に神奈川県山北町で初めて記録され、東京都では1980年に八王子市で初めて記録された。埼玉県では、1978年に名栗村で交通事故にあって死亡したものが最初の記録である、青梅市側から埼玉県内に侵入し、秩父地域を中心に分布を拡大したようである。その後、県内全域で生息が確認されるようになった。近年、東京都区内での目撃情報が急増しており、市街地の寺社が繁殖場所となっていることが指摘されている。

6 ガビチョウ(チドリ科) *Garrulax conorus* 特定外来生物・緊急対策外来種



分布状況

県南部から北部にかけての低地帯からの確認情報がほとんどないが、以前、冬期に見沼区で見ているので、冬期の動向がやや気にかかる場所である。

環境別報告件数

環境別報告件数を見ると、圧倒的に雑木林からのものが多い。また、河川敷の樹林地にもかなり生息していることが推測される。さらに市街地からの確認情報もあり、県内各地に分布していることがうかがえる。

種の概要

東南アジア原産のペット由来の外来種である。「江戸時代から輸入の記録がある」とされている。1980年代から北九州で観察記録があり最も古いものとされている。下層植生の発達した林に生息しており、モズより少し大きく体色は茶褐色で、目から後ろにかけて白い眉斑が伸びるのが特徴である。クロツグミ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウなどの囀りをまねることもあり、夏季は注意を要する。繁殖期以外でもよく鳴くことが知られている。密生した藪を好み姿が確認し難い鳥であるが、写真のように電線上で囀ることもある。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	43	54.4
河川敷	B	19	24.1
水田・休耕田・畑	C	11	13.9
市街地	D	6	7.6
合計		79	100

当該種の消長

国内では南東北と西関東から中部にかけての範囲と九州北部に分布している。県内では10年ほど前から急激に目撃情報が増えている。「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)によると、里山の放置による藪の増加がガビチョウに好適な生息場所を増加させたとしている。在来種への影響についての詳細な報告はないが、本種が定着しているハワイでは在来種の個体群密度に影響を与えているようだ。ウグイス、シロハラ、アカハラなど発達した下層植生中や林内の地上部で活動する鳥類と競合する可能性が指摘されている。県内に定着した感があるが引き続き動向を調査することが望まれる。

9 ソウシチョウ(チドリ科) *Leiothrix lutea* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はソウシチョウ確認地



分布状況

今回は入間市の雑木林からの報告のみであった。

調査期間外ではあるが、2017年1月26日に大麻生野鳥公園でも確認している。

近県では古くは茨城県筑波山での繁殖記録があり、今でも筑波山でよく見ることができる。冬期には標高の低い竹林や笹藪などに移動するようで、以前、東松山市や岩槻区の雑木林内で小さな群れになっているのを観察したことがある。

環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	100
河川敷	B	0	0
水田・休耕地・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		1	100

環境別報告件数は既述のように雑木林からの1件だけであった。本種は藪を好むことから、確認地周辺はあまり手の入っていない樹林地であることが推測される。

種の概要

東南アジアから中国南部、ヒマラヤ西部にかけて分布する。スズメほどの小さな鳥で、羽色は写真のように大変にカラフルで美しい。江戸時代から輸入されていたが、1980年代から関東以南で急速に個体数が増加し九州でも生息している。標高1000m前後で林床にササの発達した樹林を好み、個体数が増加するとより標高の低い地域でも繁殖する。中国では昔から飼い鳥になっており、ヨーロッパや北米へ輸出されていた。現在、ハワイやヨーロッパでも定着している。小さい体のわりには大きな声で複雑な節回しで雌雄ともに囀る。

当該種の消長

国内では、主に西日本から関東にかけて生息している。在来種への直接的な影響についての報告はないが、本種が増加することに伴い天敵が誘引されることにより、他種鳥類の繁殖に影響が出ているとの見解もある。県内では秩父山系で繁殖していたが、近年ニホンジカの食害によりスズタケがなくなってしまう、生息地が減ってきたことに伴い観察数が減少している。結果的に、冬期の低地での観察記録も減少しているようだ。

10 カミツキガメ(カミツキガメ科) *Chelydra serpentine* 特定外来生物 ・ 緊急対策外来種



分布状況

所沢市の砂川堀（荒川水系）で目撃された 1 例の報告があった。

環境別報告件数

1 件、河川敷からの報告があった。

種の概要

カナダからエクアドルにかけてのアメリカ大陸原産で、ペット用に輸入されたものが捨てられ野生化したとみられる。甲長約 50 センチ、体重約 35 キロまで成長する大型種である。背甲には 3 本の隆条があり、後端はぎざぎざ。腹甲は小さい。四肢は強靱で頭部が大きい。尾は長く雄の方がより長くなる。

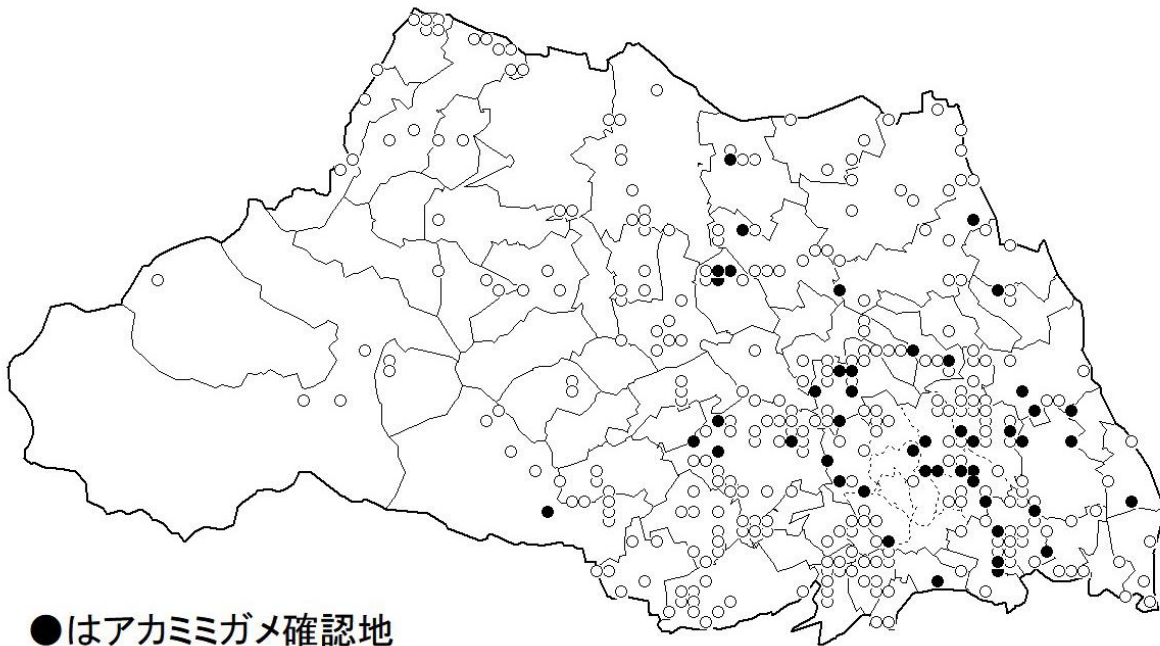
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	100
水田・休耕地・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		1	100

かまれた場合、大けがの恐れがある。緩やかな流れや止水性の水生植物が繁茂する深い水場を特に好む。雑食性で幼体は肉食傾向が強い。

当該種の消長

日本では 1960 年代からペットとして輸入されたものが捨てられ各地で野生化している。千葉県印旛沼付近や静岡県では定着しており、東京都練馬区光が丘公園でも定着の可能性はある。埼玉県では 2006 年に初めて県東部で発見された。その後、さいたまや越谷、春日部、行田、川越市など荒川・利根川水系などで毎年数頭から 20 頭近くの個体が捕獲されている。捕獲や目撃地点が広がっており、定着の可能性も含めて今後の動向が注目される。

11 アカミミガメ(ヌマガメ科) *Trachemys scripta* 緊急対策外来種



●はアカミミガメ確認地



分布状況

山間部や北部からの報告が少なかったが、利根川や荒川水系の河川敷を中心に県内各地から多くの報告があった。特に荒川水系のさいたま、上尾・川越・川口市からの報告が多かった。今年度、県西部では入間、狭山、新座市からの報告がなかった。

環境別報告件数

昨年と同様に河川敷からの報告が多かった。内訳は川や水路内の他、公園の池での報告が多かった。次いで水田・休耕田・畑と市街地からの報告が多かった。雑木林からは1件の報告があった。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	1.8
河川敷	B	39	68.4
水田・休耕田・畑	C	9	15.8
市街地	D	8	14.0
合計		57	100

種の概要

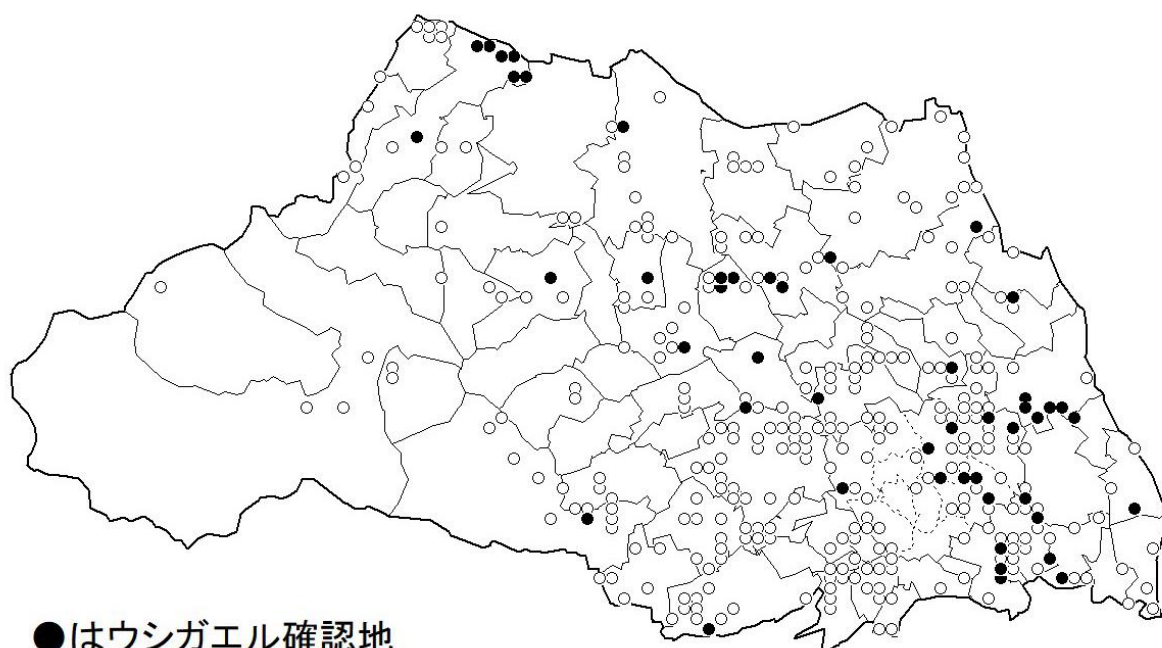
アメリカ大陸原産の外来種。幼体がミドリガメという名称でペットとして大量に販売されてきた。

目の後方に鮮やかな赤い線が入ることで、これを耳に見立ててアカミミガメと呼ばれる。流れの緩やかな河川、湖、池沼などに生息し、底質が柔らかく水生植物が繁茂し水深のある流れの緩やかな流水域や止水域を好む。幼体は肉食傾向が強いが、成体では雑食となり何でも食べる。在来の淡水ガメとの競合や餌となる生物への影響が懸念されている。

当該種の消長

「外来種ハンドブック」(日本生態学会：2002)によると、1950年代後半から幼体が輸入され、60年代後半から野外で野生化した個体が見つかるようになった。環境省の調査によると、1990年代半ばの年間輸入量は100万匹であったが、近年は10万匹程度。2013年度の全国の飼育数は約110万世帯で180万匹と推定される。なお、「埼玉県動物誌」(1978)の「帰化動物と埼玉における現状」には、本種は記載されていない。2009年度から始まった県民参加いきものモニタリング調査報告によると分布域は低地帯を中心に県内全域に広がっている。

12 ウシガエル(アカガエル科) *Rana catesbeniana* 特定外来生物・緊急対策外来種



分布状況

県西部の山間部を除いて県内から幅広く報告があった。特に本庄、春日部、越谷市など利根川水系の県南や県東部の平野部からの報告が多かった。

環境別報告件数の

昨年と同様に河川敷からの報告が多かった。次いで水田・休耕田・畑からの報告が多かった。雑木林、市街地からの報告も少なからずみられた。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	3.4
河川敷	B	32	54.2
水田・休耕田・畑	C	20	33.9
市街地	D	5	8.5
合計		59	100

種の概要

北アメリカ原産の外来種。食用を目的とした養殖のため導入されたが、放逐され、全国の多くの地域で繁殖している。県内では最大のカエルであり、ウシに似た鳴き声が特徴的である。ほとんどのオタマジャクシ

が越冬してから成体になる。食性は肉食で昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食するが、在来の生物とくにカエル類への影響が問題となっている。

当該種の消長

日本には1918年(大正7)に初めて移入され、現在では北海道南部から沖縄まで広く分布する。2005年に特定外来生物に指定され国内では飼養・保管・運搬・放出・輸入などが規制されることとなった。「埼玉県動物誌」(1978)によると、埼玉県に入ってきたのは1936年頃で、川口市や浦和市が最初の生息地のようなものである。また、「1965年頃までは、東部、南部の平坦地の水域にかなり多く生息していたが、最近の数年間で著しく減少した」と記述されている。しかし、2009年度から始まった県民参加いきものモニタリング調査報告によると分布域は低地帯から低山帯まで広がり減少傾向はみられない。

13 ヌマガエル(ヌマガエル科) *Fejervarya kawamurai* 重点対策外来種



●はヌマガエル確認地



分布状況

昨年と同様に県北から県央、県南にかけての利根川流域や荒川流域からの報告があり、この流域で定着していると思われる。また、川越市の入間川河川敷からの報告があり、分布域を広げていることが伺われる。

環境別報告件数

今年も水田・休耕田・畑からの報告が多かった。次いで河川敷からの報告が多かった。田んぼや湿地、河川敷などの水たまりに生息していることを反映していることをうかがわせる。雑木林からの報告はなかったが市街地からの報告が1件あった。これも利根川水系の河川敷に近い公園の沼地で水辺の環境である。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	6	23.1
水田・休耕田・畑	C	19	73.1
市街地	D	1	3.8
合計		26	100

種の概要

南方系のカエルで日本、中国、台湾に分布する。日本では本州中部（静岡県）以西、四国、九州、南西諸島に分布が知られている。体長3～5cmの中型のカエルで水田や湿地、河川などの水辺周辺に生息している。繁殖期は4～8月で、産卵場所は水田や沼などの浅い部分や雨の水たまりである。オタマジャクシ(幼生)は高温に強い耐性を備えていて40℃を超えるような夏の水田でも生き残り成長することができる。

当該種の消長

関東地方では1990年代に入って神奈川、千葉、栃木、群馬などで確認された。関東地方における分布拡大は、温暖化が一因である可能性が指摘されている。侵入経路は不明であるが稲藁や苗、土砂などに混入して非意図的に持ち込まれた可能性が高い。埼玉県では2003年に加須市（利根川水系）で、2004年には寄居町（荒川水系）で確認され、荒川、利根川、江戸川水系沿いに分布を拡大しているとされる。特に利根川水系の集団は川に沿って分布を拡大しているとみられ、今後、関東平野の広い範囲に分散することが予測されている。

14 ブルーギル(サンフィッシュ科) *Lepomis macrochirus* 特定外来種・緊急対策外来種



●はブルーギル確認地



分布の状況

今回の調査では、2地点から2件の報告があった。緑区と東松山市での確認である。昨年と重複する報告はなく、確認地は昨年と今年で5地点になる。埼玉動物誌(1978年)ではブラックバスという総称で扱われており種の特定はできないが、下久保ダムに放流され、最近増殖してダムの下流でもみられるようになったとある。移入の経緯から見ても全国的に分布が広がっている現状では、県内の湖沼等にも多数生息していると推定される。

環境別報告件数

確認地は緑区内の芝川(河川敷)と東松山市の公園の池(市街地)となっている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	50
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	1	50
合計		2	100

種の概要

ブラックバス類と同様スズキ目サンフィッシュ科に属する淡水魚で、池や湖など水の流れがあまりない水草の茂る環境に好んで生息する。雑食性で、水草などの植物類から貝類、エビ類、小魚、水生昆虫類など何でも食べるため、水辺環境の生態系に多大な影響を及ぼす懸念があることから、特定外来生物に指定されている。

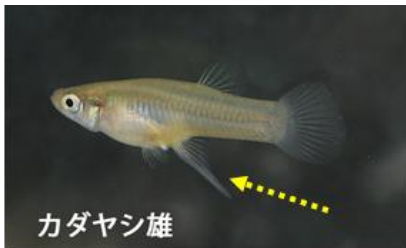
当該種の消長

北アメリカ原産の外来種であり、1960年(昭和35)に当時の皇太子殿下が外遊の際シカゴ市長から寄贈されたものを持ち帰ったのが最初で、その後食用魚としての期待のもとに静岡県湖に放流された。食用としての需要は広まらなかったものの、その後のバス釣りブームによって、ブラックバスの餌と称して各地の湖沼に放流されたものが繁殖し、全国に分布を広げることとなったと言われている。今では街中の小さな池にも群れをなして泳ぎ回る姿が確認されることも少なくない。

17 カダヤシ(カダヤシ科) *Gambusia affinis* 特定外来生物・重点対策外来種



●はカダヤシ確認地



カダヤシ雄



カダヤシ雌

分布の状況

今回の調査では、8地点から8件の報告があった。川口市5件、さいたま市緑区2件、草加市1件の確認である。このうち川口市の2件の報告には個体数が100以上と記されている。埼玉県動物誌(1978年)にはタツブミノーとして記され、県内では戸田市、川口市、蕨市、浦和市等周辺の水路、池沼などに生息しているとある。荒川自然-荒川総合調査報告書1-(1987年)では、熊谷市付近を上限としてその下流に分布するメダカは県の南部水域では殆ど見られなくなったとし、その原因の一つにカダヤシの増殖をあげている。

環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	5	62.5
水田・休耕田・畑	C	3	37.5
市街地	D	0	0
合計		8	100

昨年と同様に河川敷からの報告が多いが、水田の水路や市街地の小河川と思われるところからの報告もある。

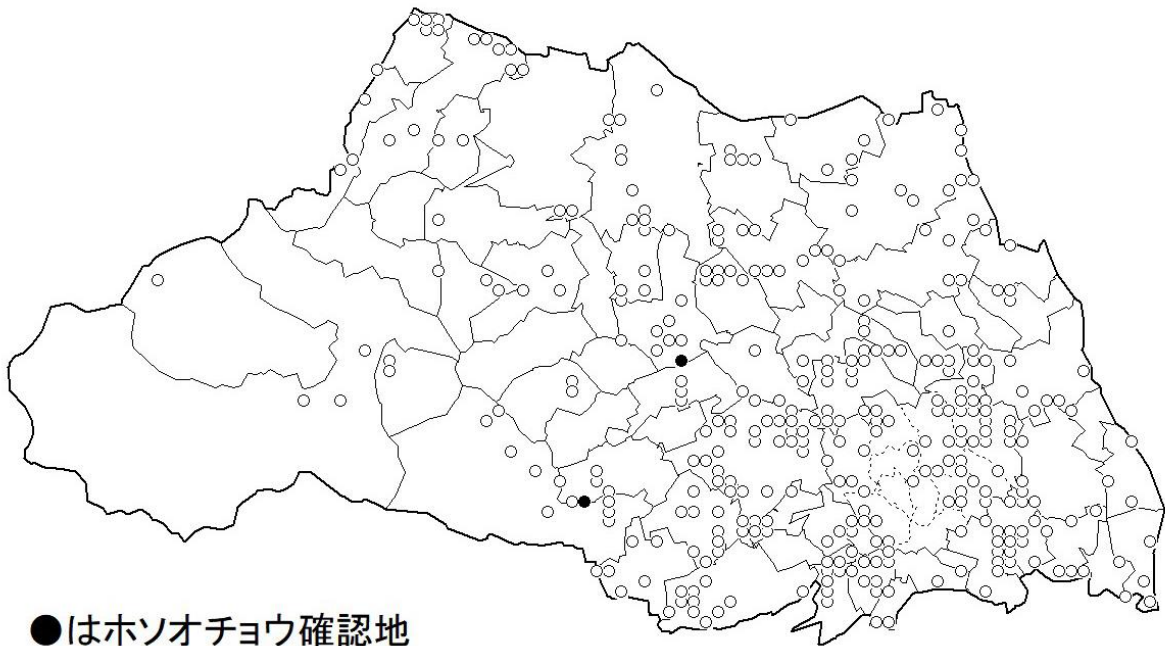
種の概要

雑食性であるが動物食を好み、自種を含め他の魚の卵や稚魚を捕食する。水槽でメダカとともに飼育すると、メダカのひれを食いちぎることが知られており、自然界で同所的に存在する場所ではメダカに対する捕食圧がかかると考えられている。卵胎生であり、グッピーなどと同様に雌の体内で受精、孵化した仔魚を産む。雌雄の区別点は写真のように尻ビレがポイントである。水面上から背面を見ただけでは、在来種のメダカ(ミナミメダカ)との識別が難しい。メダカよりも汚水に強いとされる。

当該種の消長

1916年に導入された。日本脳炎を媒介するアカイエカ対策として最近まで飼育増殖し、各地で盛んに放流していた。東北以南で分布域を広げており、今後の動向が懸念されている。

18 ホソオチョウ(アゲハチョウ科) *Seriginus japonica* 重点対策外来種



●はホソオチョウ確認地



分布状況

今年の調査では、2地点から2件の報告があった。昨年とは異なる場所での確認で、昨年の報告と合わせると4地点での確認になる。場所は坂戸市と飯能市である。昨年同様、県西部以外の確認はなく、発生場所は今のところ限られているようであるが、坂戸市での確認は個体数が100以上と記録されている。確認地で発生を繰り返している可能性がある。

環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	50
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	1	50
合計		2	100

河川敷と市街地で確認された。市街地での確認はこの調査では初めての報告である。食草に強く依存し生息していることから、いずれの場所も近くに草地があり、そこでの確認ではないだろうか。

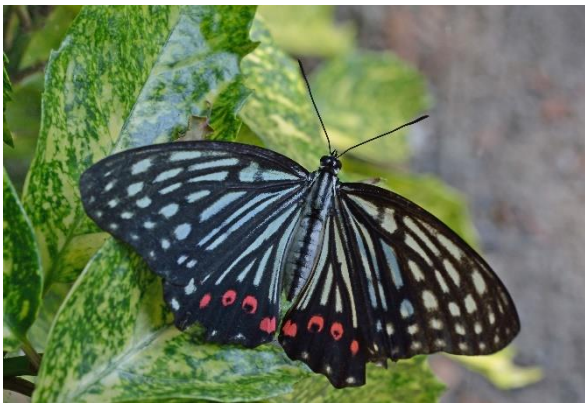
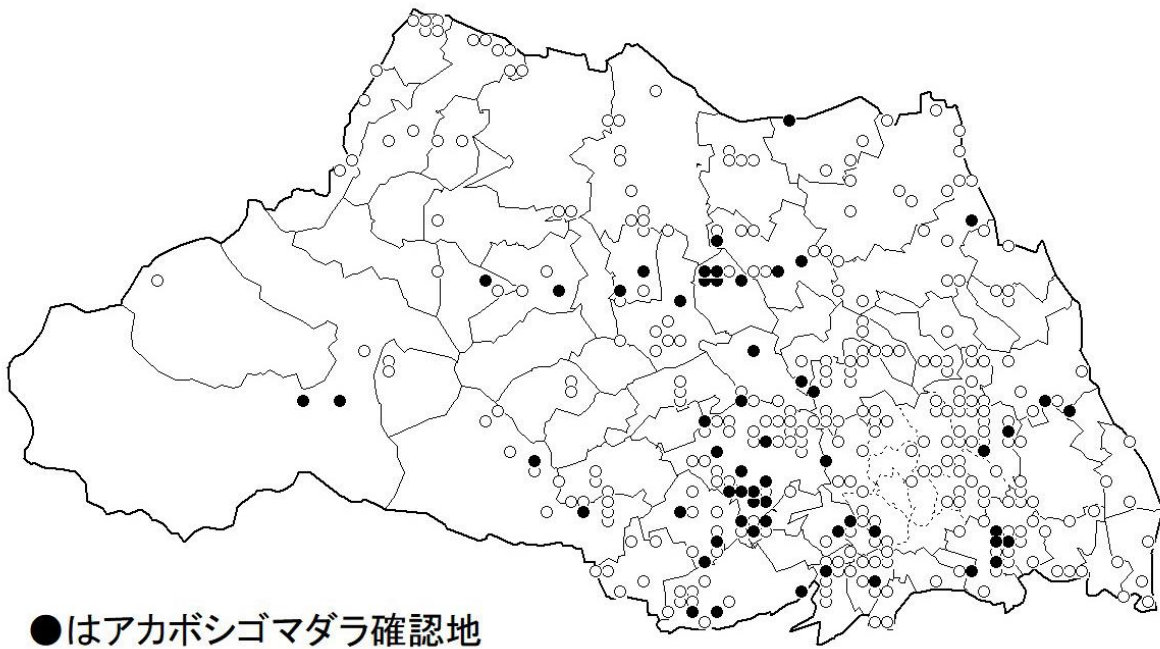
種の概要

元来、日本には分布しない、外来種（放蝶によるものと考えられている）。成虫は年3~4回発生。アゲハチョウよりかなり小さく、♂は白地に黒の縞模様。後翅に赤斑がある。♀の翅は黒っぽい。後翅にある尾状の突起が細く長い。食草（ウマノスズクサ）のある草地や河川敷などを緩やかに飛ぶ。食草がジャコウアゲハと同じであることから、競合が懸念されている。

当該種の消長

1978年に東京都で確認されてから、現在は東北から九州に至る各地で記録されている。一時的な発生にとどまる場合もあるが、県内では、近年、狭山丘陵や奥武蔵、越生町など県西部地域で度々確認され、観察会では成虫はもちろん幼虫も観察されている。移動性が低く、農業害虫ではないことから駆除されることはなく、特定の地域で発生を繰り返し、付近に拡大していることが考えられる。今のうちに発生地を特定し、早期の駆除とモニタリング調査を行うべきであろう。

19 アカボシゴマダラ(タテハチョウ科) *Hestina assimilis assimilis* 重点対策外来種



分布状況

今回の調査では、57 地点から 69 件（幼体のみの報告 1 件を含む）の報告があった。今年も調査地が県中央・東部・西部地域に多いこともあるが、同地域で広く確認された。またこの調査では初めて秩父地域で確認（3 地点）され、県北部地域から報告はなかった。確認された場所は低地帯から低山帯にわたり、これまでの県民参加の調査結果などからみて県内全域に分布が広がっていることが想像できる。環境適応性の高さと、食草のエノキが、野鳥によって種子散布され、どの環境にも生育していることが分布の拡大につながっているものと考えられる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	30	43.5
河川敷	B	12	17.4
水田・休耕田・畑	C	15	21.7
市街地	D	12	17.4
合計		69	100

環境別報告件数

雑木林での確認が多いのは昨年と同様である。他の環境においても昨年に近い割合で確認されており、特定の環境への偏りはあまり見られない。ここ

からも食草があればどのような環境でも適応することがうかがえる。

種の概要

在来種は奄美大島、徳之島、喜界島に分布。本種は中国産亜種（大陸産亜種）で、1998 年以降、分布を拡大。食草はエノキで、成虫は年 3 回程度発生。急激な増加によってもともと類似環境に生息するゴマダラチョウと生態的に競合するのではないかと懸念されている。後翅外縁に赤い斑紋が出るのが特徴であるが、春型では著しく白化した個体も出現することもあり、ゴマダラチョウと紛らわしい。

当該種の消長

平成 22 年度から 25 年度までの「県民参加生き物モニタリング調査」では毎年確認情報が寄せられ、25 年度の確認情報は 22 年度の 2.5 倍を超えた。観察会を開催する団体からも普通に見られるようになったとの声もあり、県内全域で、市街地から山間部まで生息し、拡大から定着そしてまん延期に入った可能性が考えられる。なお、今回の調査では県中央・西部・東部地域の 9 地点で幼虫も確認されている。

20 クビアカツヤカミキリ(カミキリムシ科) *Aromia bungii* その他の総合対策外来種



●はクビアカツヤカミキリ確認地



分布状況

今回の調査では、3地点から3件の報告があった。確認地は深谷市（1地点）と草加市（2地点）である。深谷市での確認はこの調査では初めて。草加市での記録は調査地コードが昨年と同じであることから、同一の地域の可能性がある。また深谷市での確認は生体、草加市はいずれも生活痕の確認である。生活痕との記録はプラス（木くず等）の確認と思われる。

環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	33.3
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	2	66.7
合計		3	100

市街地と雑木林での確認である。本種が食入・加害するサクラやモモ、ウメ、ザクロ等といった樹種は植栽により市街地でも容易に見られることから、それらの樹種での確認と思われる。

種の概要

中国、モンゴル、朝鮮半島などに生息する。成虫の体長は約2.5~4センチ。国内での発生個体は首の部分（前胸背板部）が赤く、他の種との見分けは比較的容易である。幼虫が生木に入り、樹木内で2~3年で成長し蛹となり、夏に成虫になり樹木の外に出ると考えられる。国内での生態については、確認数などが少なく知見の集積が必要といわれているが、寄生植物を衰弱、枯死させる重要害虫で、発見次第、捕殺することが必要である。

当該種の消長

2012年に愛知県海部地域で初めて確認され、2013年に埼玉県草加市、2015年に群馬県、東京都、大阪府、徳島県の4都府県で発生し、防除が試みられている。徳島県では果樹園内で広範囲の被害になった。2016年には栃木県でも侵入が確認されている。今後も新たな発生が続くと思われ、発生地においては、早急に関係地域自治体と連携し、駆除対策を講じ、同時にモニタリング調査を行うべきであろう。

24 アメリカザリガニ(アメリカザリガニ科) *Procambarus clarkia* 緊急対策外来種



分布の状況

今回の調査では、50 地点から 65 件の報告があった。確認地は、秩父地域を除く全県域（県北、県西、中央、東部）わたっている。確認された個体数は本調査では最も多く、イベントでの捕獲数を除いても全体で 900 匹を超える。埼玉動物誌（1978 年）では、流れの速い水温の低い清水には生息しない、山間部の沢や谷以外、全域に分布するきわめて普通種であるとしている。

環境別報告件数

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	29	44.6
水田・休耕地・畑	C	28	43.1
市街地	D	8	12.3
合計		65	100

河川敷、水田等のほか今年も市街地で確認された。コンクリート三面張り用水路で確認との報告もあり、汚染された水質でなければ環境を選ばない強い適応力がうかがえる結果となっている。

種の概要

大きなカニのようなハサミを持つことからザリガニという名称が付いているが、十脚目アメリカザリガニ科のエビの仲間である。雑食性で小魚や水生昆虫などの生態系に影響を与えるほか、稲苗を食べたり畔に穴を開けたりして農家からは嫌われものとなっている。

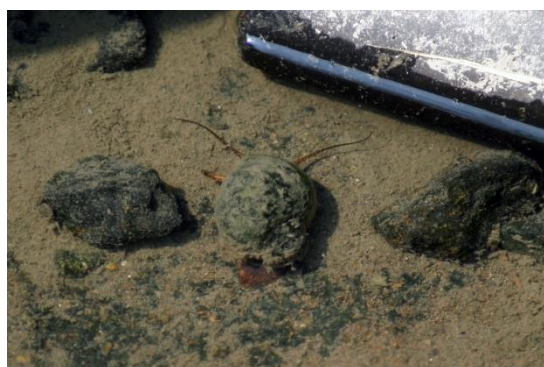
当該種の消長

アメリカザリガニは北米原産で、1927 年（昭和 2）に食用ガエル（ウシガエル）の繁殖用の餌として持ち込まれたのが最初で、その後急速に各地に分布するようになった。繁殖池から逃げ出したこともあるが、それ以上に人為的に各地に持ち込まれたものと推定されており、祭りや縁日の屋台などでよく売られ、ペット化したことがその要因のひとつと言われている。県内に入ったのは 1937 年頃で、1940 年 7 月の関東一帯をおそった大雨出水のため、県南部一帯のあらゆる水域でどこでも見られるようになった、と荒川自然－荒川総合調査報告書 1－（1987 年）にある。

25 スクミリンゴガイ(リンゴガイ科) *Pomacea canaliculata* 重点対策外来種



●はスクミリンゴガイ確認地



環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	0	0
水田・休耕地・畑	C	2	100
市街地	D	0	0
合計		2	100

分布の状況

今回の調査では、2地点から2件の報告があった。確認地は、さいたま市桜区と鴻巣市である。いずれの報告も昨年の確認地の近くで、個体数も多い。旺盛な繁殖力を考えると、早急に対策が必要であろう。

環境別報告件数

本種は水田などの水辺環境に依存することから、今回の報告もすべて水田等での確認であった。

種の概要

俗称「ジャンボタニシ」と呼ばれるように大型の、巻貝で、主に水田や水路に生息する。初夏から秋にかけてが繁殖期で、卵は水中ではなく稲の茎や水路の壁などに鮮やかなピンク色の卵塊として産み付ける。卵塊はワックス質に覆われていて硬く、乾燥や雨などから守られるようになっている。本種は草食性が強く、大量に発生することで農作物への食害が懸念されている。

当該種の消長

スクミリンゴガイは中南米原産の外来種で、日本には1980年代に食用として移入され、一時期全国で盛んに養殖されたが、需要がないことから養殖が廃業になるに伴って廃棄され、野生化して現在に至っている。南方系の種のため北日本の冬は越せず分布は広がっていないが、温暖な西日本を中心に爆発的に繁殖しており、埼玉県内でも広がりを見せ始めている。